

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 213 回 人は石垣、人は城、情けは味方、仇は敵

2007.8.5

平均視聴率 16%前後をとる NHK 大河ドラマ「風林火山」、小生、テレビの連続物はあまり見ない性分だが、久々に日曜の夜が楽しみである。文字通り、武田信玄をテーマにした時代劇、いよいよ長尾景虎（ながおかげとら・後の上杉謙信）との確執を描く、ドラマとして渦中に入る。

戦乱の世、他国は堅固な城を築いているなかであって、信玄在世中は城を持たなかった。武田信玄は、本国甲斐には城を築いていない。躑躅ヶ崎館（つつじがさきやかた）の居館も城というには程遠い構えであった。信玄の旗はつねに外に向かって動いた。信玄が心血を注いだのは、いかに立派な城を築くかではなく、民政の充実にあった。つまり武田信玄という武將は、この時すでに、「民政が軍事力の基礎である」ことを知っていたのである。釜無川に今も残る信玄堤はこれを物語っている。

勝敗を決する決め手は、堅固な城ではなく、やはり人の力である。個人の力や特徴を掴み、彼らの才能を十分に発揮できるような集団を作ることが大事である。

また、人には情理を尽くすこと。誠実な態度こそが相手の心に届き、人を惹きつけることに繋がる。逆に相手を恨めば必ず反発にあい、害意を抱くようになる。

城の石垣は、大小さまざまな石が、その形状によってうまく組合わされ、全体が一つにまとまっている。人の組織も、個人個人の特性と能力を活かして、一体となって組織力が発揮できるよう編成されなければならない。それには、個々の人々が、心を通わせ、互に協力する団結が必須の要件である。

では、人の心を結ぶには何が大切か。いうまでもなく、それは「情」であろう。情とは、他を思いやる心である。情（なさけ）を味方につけなければならない。

その石垣には礎石がある。組織の礎をなすのは「将」、つまりリーダーである。孫子は、将とは「智」・「信」・「仁」・「勇」・「威」なりという。が、将は一朝一夕にはならない。「玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によって仁となる。リーダーは、リーダーたるべく、自らを修めなければならない。

勇猛果敢で恐れられた武田軍の精神構造の基礎は、この、孫子の教えから成り立っていた。

これを信玄は一言で...

「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」(甲陽軍鑑より)

と、述べている。

全く今の時代に、そのまま通じる考え方であろう。いやむしろ、今こそ絶対的に必要な思想というべきかも知れない。人間関係が希薄だと言われる時代、こんなところにも突破口があるようにも思える。もしかして原点回帰が大事な時なのかもしれない。

難しい屁理屈を言いながら、大河ドラマ見る姿、全くもって「おじさん」の世界にはまってしまった、今日この頃である。